

大岡昇平全集

第九卷

大岡昇平全集 第九卷

定価 三五〇〇円

昭和四十九年八月十日 印刷

昭和四十九年八月二十日 発行

著者 大岡昇平

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一

電話(五六一)五九二二

〒104 振替東京三四

検印廃止

©一九七四

大岡昇平全集
第九卷
目次

小説 九

マテオ幻想

コルシカの脱走兵

島

凍った炎

ナポレオンの眼

幼年

一 新小川町の家

二 赤十字病院前

三 氷川神社前の家

四 稲荷橋付近

五 渋谷第一小学校

122 107 83 78 71 71 57 45 26 15 3

六 宮益坂界隈

七 大向橋の家

あとがき

萌野

戯曲

戯曲『赤と黒』 三幕十九場

遙かなる団地 三幕八場

解題

池田純溢

479

425

327

181 179 153 133

小説
九

マテオ幻想

1

いつその本を買ったのか覚えていない。一九六〇年の出版で、丸善の洋書売場で、なんとなく売れ残った感じだったから、その二年か三年あとだったろう。七十頁ばかりの小冊子で『マテオ・ファルコーネのテーマ』がその題である。著者はマリア・シオスコという聞き馴れない名前のアメリカ人である。——ただしこれは序文に「ニューヨークにて」とあるところからそんな気がするだけで、フランス語で書き、パリのニゼ書店から出版している。当時ニューヨークのどこかの大学でリサーチしていたフランスの女性かも知れない。

「マテオ・ファルコーネ」は申すまでもなくプロスペル・メリメの有名な作品で、コルシカの地主マテオが、裏切り行為を犯した一人息子を射殺する話である。その緊密な構成と巧

みな話術によって、短篇小説のバルナンスに祭り上げられている作品である。

私の少年の頃、短篇を書くためにメリメとモーパッサンは是非読まねばならぬ作家とされていた。(たしか菊池寛の文学志望者への忠告だった)「マテオ・ファルコーネ」は、少年に対する教訓を含んでいるので、戦前は少年少女向きの書き直しもあったはずである。そんな関係で、幾度かくり返し読んだ作品であるが、その後、時代も私の趣味も変った。昭和になると、うまい短篇を構成することは、それほど大事なこととは考えられなくなった。作者が提示する人生の断片含蓄の深さに感興を催すというような鑑賞法は流行らなくなった。長篇でがながん書き尽すのでなくて、大作家とは見做されなくなった。

メリメは私にとって、スタンダールの友人、文通者(もともとその大部分を焼いてしまった不実な文通者であったが)、

回想の筆者としてしか興味はなかったのだが、ふと丸善の書棚で見付けた『マテオ・ファルコーネのテーマ』を買ってしまった最大の理由は、どうやら値段の二百七十円という安さのせいだったらしい。近頃、洋書も和書も千五百円、二千元という法外の高値になってしまった。七年前ではそれほどでもなかったが、それでも二百七十円といえば法外に安い。生来のさもしい根性から、つい買ってしまったのである。

小型七十頁だから、読むのに手間はかからない。著者はアルベル・カミュの「誤解」にある「子殺し」のテーマについて論文を用意している篤学の士で、その協固めとして「マテオ」について小冊子分の研究をしたのだった。一時代前に流行った、「テーマ主義者」の一人であるらしく、この挿話の起源や異説を克明に集めている。私はそれによってメリメが「マテオ・ファルコーネ」のもとにした挿話では、憲兵に追われていたのは、ただのアウトローではなく、脱走兵であることを知った。父が子を殺すまでも、種々いささかがある。メリメがそれをどういう風に変形し集中化し、場所と時間の一によって劇的な効果を挙げているかを知った。

なるほどと感心したが、元來物語の起源とかヴァリエーションとかは、それは知ったからといって、別にどうということはないものである。従ってなるほどと思っただけで、そのまま忘れてしまったのは自然であった。

私がこの本とメリメの原作を読み返す気になったのは、ごく最近のことである。一九六七年から、私は「レイテ戦記」という、この前の戦争最後の段階で、レイテ島をめぐるの日本海軍の戦闘の記録を書いたが、ついでにフィリピン共和国の歴史も読む必要があった。フィリピンは、周知のように、一八九八年、スペインからアメリカへ二千万ドルで売られた。ところが、その時は反乱によって、群島の大部分は四百年来のスペインの植民地支配から脱していた。フィリピン人は新しい主人、アメリカと三年争った後、屈服したのである。

地中海の北部の島コルシカ島も、五百年間北の方のジェノヴァ共和国に支配されていた。それがフランス領となったのは、一七六八年で、やはり売却によってであった。前の持主が相継ぐ反乱に手を焼いて、売り飛ばしてしまったのもまったく同じである。一七五〇年代からの指導者バオリの下での抗争は、アメリカ独立戦争と共に、ヨーロッパの耳目を集めていた。反乱がフランス領になってからも続いたのは、フィリピンの場合と同じである。そして「マテオ・ファルコーネ」の起源となった挿話は、フランス駐屯軍とコルシカ人との関係、その名譽に関するものであった。それが、巧みな語り手メリメによって、どうして厳格な家長マテオの悲劇に替えられたか。

「マテオ・ファルコーネ」は一八二九年、作者二十五歳の時

の作品であるが、彼はすでに『シャルル九世治世年代記』によって、後年の考証家としての才能を十分現わしていた。七月革命後は王室財産管理官、ナポレオン帝政時は元老院議員であり、皇后ウジェーニイの相談役であった。その小説家のメチエと共に、政治的意識がどういふ風に働いているか。どうして小説において古典が成立したか、などなどについて、限りなく夢想が拡がって行った。それを書きとめておきたいと思う。

2

「マテオ・ファルコーネ」は次のように書き出されている。「ポルト・ヴェッキオを出て、島の奥へ、西北に向って行く」と、土地はかなり急激に高まって来る。曲りくねった小径は、大きな岩場に阻まれたり、時にはほれ溝によって切れたりするのだったが、そうして三時間行くと、広いマキの縁に達する。マキはコルシカの羊飼と、法に触れた者の園である。コルシカの農夫は、畑にこやしをやるのが面倒なものだから、林の適当な広さに火をつける。火が必要以上に拡がることもあるのは仕方がない。どっちにしても、そこに生えていた木の灰で肥えた土地に種をまけば、よい収穫があるのはたしかなのだ。麦の穂を抜く。麦藁は面倒だからそのままにしてお

く。すると焼けずに地下に残った木々の根から、翌年の春、びっしり詰った新芽が出る。そして幾年かの間に、二、三メートルの高さに達する。マキと呼ばれるのはこういう茂った雑木林のことなのだ。いろいろな種類の樹木や灌木が、勝手気儘に入りまじり茂っている。その中を通り抜けるには、斧を持って行かなければだめだ。野生の羊さえ通れぬくらい、厚くからみ合ったマキもある。

人を殺したら、ポルト・ヴェッキオのマキへ行くに限る。いい鉄砲が一丁に火薬と弾さえあれば、安心して暮して行けるだろう。忘れてはならないのは、頭巾ビロキつきのマントで、それが寝具のかわりになる。羊飼が牛乳とチーズと栗の実をくれる。弾薬を仕入れにどうしても町へ降りなければならぬ時のほか、その筋の者とか殺した相手の親類なんかこわくない」

この簡潔な書き出しも有名である。さり気なく悲劇の舞台の描写からはじめるのは、イギリスの歴史小説家スコットや暗黒小説の常套手段で、ロマン派の、いわゆる「地方色」の描出に引き継がれた。スコットの長々しい序奏部や、スタンダールやバルザックの舞台設定にも用いられている。メリメのマキの描写は時代の趣味の中を行くものだが、その簡潔さと無駄のない点ですぐれている。(短いということもメリメの美学の一つだった。「マテオ・ファルコーネ」は流布本で

十四頁しかない。デュ・ボスによれば、スタンダールが満月の輝きを持っているとすれば、メリメは三日月だった）

マキ (magis, maks) という名は、前大戦の末期、フランスのレジスタンスの地方地下組織の名として、覚えている人もいよう。ノルマンディ上陸作戦の前夜、バラシエートで降下したイギリスの挺身隊は、林の中で、たちまち「誰何」の声に取り巻かれる、しかしやがて現われるのは、背広に銃だけ持った友好的フランス人だった、というようなシーンを映画で見た人が多いに違いない。これが山野にかくれた地下組織員で、マキはその秘匿名だった。コルシカのマキの記憶はフランス人の間に強く印象づけられていたのである。

一九四三年、ドイツはヴィシー政府に、フランスの労働人口の大量徴集を命じる。フランス人が決定的にドイツと、ペタンに背を向けてしまったのは、それからである。北部の占領地区とかドイツへ連れて行かれるのを嫌った人々は脱走して、コルシカ人がマキに隠れたように山野にかくれた。最初は主として鉄道破壊、軍事物資の破壊、略取を行ったが、次第に組織されて、連合国とドゴール政権のために、諜報活動に従事する。その数は正確にはつかめないが、一〇万人と推定されている。

一九四四年六月六日の、ロンドン・ラジオの指令によって、三〇〇〇人のマキが南仏ヴェルコール山中に集って、ドイツ

軍に包囲殲滅された。マキは分散して隠密行動を行ってこそ効果的なので、いくら連合軍上陸が近いとはいえ、これは全く無意味な行動だった。ただドイツ軍二個師団を一カ月引きつけておくという効果しかなかった。

一九四三年のマキも今日ではフランス語辞書に載っているが、この語がコルシカ方言マッキオ magchio から出てフランス語になった年を、リトレは一八二九年としている。これは「マテオ・ファルコーネ」が『パリ評論』に発表された年である。それまでは主に magis と書かれたが、メリメの使った magis が定着したらしい。(もっとも手紙では一八四〇年になっても maks を使っている) それほどこの作品は発表当時から世評が高かった。

コルシカの首都アジャクシオとバステリアにマルセーユから定期郵便船が通い出したのが一八二七年、コルシカに対する関心は高まっていた。自由党の雑誌『グロープ』は毎号コルシカの歴史や地理に関する記事をかかげていた。それまではコルシカについては、むしろ忘れたい気持だったのに。なぜなら一人のコルシカ人が二十年間フランス人の鼻面を取って引き廻し、一時ヨーロッパの覇者の名誉を与えたと同時に、一八一四―一五年の敗北と三年の連合軍による占領、王政復古を齎した大変な人物の故郷だったから。いうまでもなくナポレオン・ボナパルトである。

続いて、「タマンゴ」(一八二九年)、「トリクトラクの勝負」(一八三〇年)、「エトルリアの壺」(一八三〇年)によって、短篇作家としての地位を不動のものとした。

ただし何分二十五歳という若さであるし、この時はメリメはまだコルシカ島へ行ったことはなかった。マキの描写は簡にして要を得ているが、焼畑耕作について、やや認識不足の気味がある。殊に、マキへ逃げ込めば、「食物に困らない」というのは、少し楽観的にすぎる断定である。

焼畑耕作或いは火田法は申すまでもなく人類の原始的農耕であって、いくら未開なコルシカでも、沿岸地方の農民はとっくの昔に廃止している。不毛な山地に追い上げられた非力な少数民族だけが止むを得ず行うのである。コルシカ島に最初渡って来たのは、北方からのリグリア人だったらしいが、以来、フェニキア、ギリシア、ローマ、カルタゴ、ヴァンダル、ゴート、イスラム、スペイン、アフリカ、トルコなど、諸人種の侵入を受けた。その人種構成は雑多で、山に入っているのは、地中海にあつては異人種である金髪碧眼の北方系である。

焼畑農耕作はそれら山地民が耕地を得るために行われるものだが、メリメが描写するように、やたらに火をつけたところで、森は燃えはしない。予め木を伐り倒しておき、一定の期間をすぎ、枯れかかってから、火をつけるのである。一度

収獲したあとに生える雑木林は、林学では第二次森林と呼ばれるが、高さ二、三メートルしかない樹木であるから、その伐採は一層組織的に行われる。伐った幹や枝が、ほぼ平均して土地を蔽うように整理してから、火をつける。輪伐制を取っているから、その伐採面積も尨大なものとなる。

フィリピンにはアエタというネグリト系の先住民族があり、ルソン、ミンドロ、ミンダナオの諸島の山中に引込んで、焼畑農耕を行っていた。私が駐屯したミンドロ島山中にはマンガヤンという混血族がいて、私はその畑を見たが、伐り倒された大木が、真白に枯れて、思い思いの角に倒れているのが、印象的だった。

焼畑農耕はアエタ、マンガヤンだけではなく、例えばレイテ島西南部のピサヤ人の一部もやっている。ルソン島では貧しい小作人がひそかに山林に入り込んで行う。戦後、その耕作面積は群島全体では、無視出来ない面積に達し、山林を荒廃させ、洪水公害を発生させるに到った。一九六七年焼畑を禁止する法律を制定したが、これが山地民がイモ、米、とうもろこしを得る唯一の手段であり、代替地が与えられない以上、実効はなかった。

日本においても、幕政時代には、検地分以外のかくし田として、山林中の傾斜地などに、小規模の焼畑が行われて、粟、ヒエ、キビなどが植えられていた。申すまでもなく当時では

農民の口に入る唯一の食料であった。十年ばかり前、高知県の山間部で、まだ焼畑農耕が河岸傾斜地で行われているのを私は見た。

これらの雑木林に逃げ込む「法に触れた人間」をコルシカでは、banditと呼んでいる。これはいま行われている各種訳本では「悪党」「悪者」「お尋ね者」と訳されているが、メリメはわざわざフランス語で、プロスクリ *proscrit* と注をつけている。元来は追放者或いは進んで共同体から離脱したものを意味し、今日半分日本語化した英語でいえば、アウトローのことである。

バンデイトは英語の第一義は「山賊」「追い剥ぎ」になる。これはナポリ付近の山賊のロマンチックな物語を聞いたイギリスの観光客が持つて帰った観念だった。イタリア語の *bandito* は *bando* 「党派」から出て、一種の政治集団である。

コルシカは有史以来、度々征服されたので、支配者と正義は同義語ではなかった。裁判所のあるバステリア（島の北端、ジェノヴァ支配の中心）に行けば、裁判は金で買えたのである。正当な裁きを受けるあてのない者、特に政治犯は必ずマキに逃げ込んでしまう。そして住民はそれらのアウトローに対して、必ずしも敵対的ではないのである。彼等に食物と弾薬を与え、時には隠れ家も提供する。マキがバンデイトの天国となるのは、焼畑農耕による第二次森林のためではなく、羊

飼と周辺の住民の支持があるためなのである。

しかしこうして山に逃げ込んだ者の生活は決して楽ではなかった。「マテオ・ファルコーネ」では、それは天国のように書かれているが、メリメはその後、少し意見を変えている。一八三九年、彼は文化財保存委員としてコルシカへ旅行し、「コロンバ」（一八四〇年）を書いた。これはコルシカの山地人の地主の娘が、逡巡する兄をそのかして（兄はナポレオンの軍隊に投じ、長年島を離れていたため、コルシカの復讐（ヴァンデッタ）の精神を忘れてしまったのである）父の復讐を遂げさせる物語である。五年後「カルメン」に結晶する野性の女の典型で、メリメの人気を大衆的にしたヒロインである。そこに何人かのマキの住人が登場し、主人公の小説的な逃避行が語られる。マキの住人に「マキ暮してのは、腹が空るってことでさあ」といわせている。

ついでに言えば、「コロンバ」の主題であるヴァンデッタの慣習は、支配者の正義があてにならぬから、決闘裁判の形で存続しているのを見ることができる。

「マテオ・ファルコーネ」の劇は裏切り、露顕、子殺しが、二時間ばかりの間に圧縮されている。しかしバンデイトとコルシカ人との関係において見るなら、事件の意味はもう少し複雑である。しかしそれらについて語る前に、一応、メリメが事件をどう小説化しているかを紹介するのが順序である。

メリメは簡潔なマキの説明に続いて主人公マテオを次のように提示する。

「(私が)一八**年にコルシカへ行った時、マテオ・ファルコーネは、マキから半里のところに家を持っていた。土地ではかなり裕福な方で、氣位を保って暮らしていた。遊牧民といつてもよい牧人が、山のあちこちで草を喰わせる、彼の所有の羊からの上りで暮らしているということだった。私が彼に会ったのは、これから物語る事件があつてから二年の後だったが、年はせいせい五十ぐらに見えた。丈は低いがあつしりした体つき、漆黒の縮れ髪、鉤形の鼻、薄い唇、大きな生き生きとした眼、長靴の裏革のような顔色をした男を想像していただきたい。小銃の射撃のうまいことでは、よい射手の雲のようにいるこの国でも、抜群との評判を取っていた。(続いてその例が紹介される。百二十歩はなれて、相手の肩なり頭なり、好きなどころへ当てた。夜、八十歩の距離で、血ぐらいの大ききの蠟燭の風除けに、蠟燭を消したあとで、四発に三発を命中させた、などなど)友達にするのはいい男だが、敵に廻すのは危いといわれていた。しかしとにかくよく人の面倒を見るし、施しものもするので、ポルト・ヴェッキオ界

限では、みんなと仲良く暮らしていた」

コルシカ島はその三分の二が山地で、マキとバンディのほかに出稼ぎ人によつて知られている。島民の多くはジエノヴァ、ピサ、マルセーユへ行って、水夫、木工、兵隊になった。一八二九年の時点で、最もフランス人に印象深かったのは、ナポレオン戦争の段階で大いに役立った、よい射手としての素質だった。(そして申すまでもなく、ナポレオン自身、コルシカ始つて以来、最も成功した出稼ぎ人だった)永年圧制者に対して、鉄砲一丁と乏しい弾薬で戦つて来たので、一発必中の技術を発達させていたのである。(メリメは「コロンバ」では、片手射ちで、二人の敵の眉間の真中を同時に射抜く、西部劇のような場面を描いている)

マテオは多くの家畜の所有主であり、同時に多分地主という特権階級に属しているが、射撃の伎倆において、自分の腕だけを頼りに生きる冒険者の特質を、コルシカ人一般と共有していることになる。

「野羊を射つのに、鹿狩り用の弾を使ったことはない」とメリメは書く。これは目標の急所を狙つて一発で殺すということである。これは「モヒカン族の最後」などでアメリカ・インディヤンの射手を書いたクーバーに出て来る句である。「鷹の眼」がクーバーの主人公の渾名だが、これは「ファルコーネ」(鷹射ち銃)と「鷹」という字で共通している。メリメは

その叙述において、誇張を排し現実的だが、多くの点でロマ
ンチスムの痕跡を残している、と研究者は指摘している。

マテオは小説の中で二度しか弾を使わない。最初はポルト・ヴェッキオと八十キロ離れた北方の山の中の町、コルチで、現在の妻であるジュゼッペを手に入れた時で、恋敵の男が、窓際に小さな鏡をおいて、髻を剃っているところを、一発で仕止めた。美しいジュゼッペが女ばかり生み続けるので、マテオはくさっていたが、四人目にやっと男の子を生んだ。フォルテユナート（さずかり物）と名付けて大事に育てられた。男の子はむろんコルシカでは大事な跡取りでもあり、戦力であった。そしてその一家の希望は十歳になり、見込みのありそうな素質を見せはじめていた。しかしマテオが二度目に弾を使うのは、フォルテユナートを殺すためだったのである。

以上のような人物の紹介とシチュエーションの準備の準備的展示が約八十行、劇はある秋の一日、フォルテユナートが家の日向に寝転がっている場面から始まる。前に書いたように、なるべく短く短くということが、メリメの小説美学の重要な要素で、これは読者の注意力をむだに疲れさせることなく主題に保持しておく効果がある。（この美学は今世紀に入ってから、すたれてしまったので、私はこの通り、実に長ったらしく書いています）

「青い山々を眺めたり、次の日曜日には町へ行って、伯父さ

んのカポラルの家で、御馳走になろうなどと考えていた」
ところがここで物語はメリメがつける八行の長い注で中断される。一体「マテオ・ファルコーネ」十四頁の間に、コルシカの風俗、言語について、注が八つもある。これは地方色を出すための技巧だが、同時にコルシカに関心が高かった当時のフランスの国情を反映している。

当時、フランスはシャルル十世の教権的反動政策が行き詰り、次の年には七月革命が起って、ルイ・フィリップの金権的中庸政府に移行するのだが、行詰りを打開するために植民地政策は積極的だった。一八二九年はフランスのアルジェリア進出の年であり、自由党の新聞雑誌はコルシカについて毎号紹介記事を載せ、「コルシカに対するフランス人の義務」を説いていた。フランスの梟の一つであるコルシカに対する福祉対策が十分でないのに、アルジェリアに手を出すな、というわけである。

「マテオ・ファルコーネ」はそういう論文の一つに起源を持っていて、時代のコルシカへの興味に便乗した作品だった。メリメが読者が必ず読んでくれると確信してつける長い注は、カポラル (caporal) に関するものである。

「カポラレとは、昔コルシカの村落共同体 (communes) が封建領主に対して反乱を起した時の首領である。こんにちでも、その財産、親戚関係、取引関係で、一つのピエヴェ

pieveつまり郡シヤの上に、権威を持ち、一種の長官職を行使している者に、どうかするとこの名が与えられる。コルシカ人は古来、習慣上、五つの階級に分れている。貴族（マニフィコとシニョリに分ける）、カポラリ、名士シヤ、平民、外国人である」

カポラルはフランスの軍隊用語では伍長である。ナブレオンが兵士から「小伍長」と渾名され親しまれたのは有名だが、もとはマキヤベルリが一五〇三年フィレンツェの市民軍を編成した時、採用した名称といわれる。四人の兵隊と一人の伍長が最小単位であつたらしい。（従つてこれを「伍長」と訳した明治の軍制の組織者はなかなか学者であつた）

マキヤベルリはフィレンツェの市民から軍隊を徴集して、北方の大君主国の騎兵に対抗させようとした。小単位は同一地区でまとめる方がよいが、小隊長は、他の地区出身者を選ぶ方がよい、などと細かい配慮までしている。リトレによれば、「一人の伍長と四人の兵隊で片付ける」というのは「たやすい」という意味だが、同じ言葉で「追い立てる」となるのと、「力づくで」という意味になる。一つの言葉でも使い方によつてずいぶん変わるのである。

近代の諸国の兵制では、十二人から成る分隊の長、歩兵の最小の戦闘単位である。しかし、コルシカのカポラレはマキヤベルリのカポラレよりも五百年古い。

十一世紀初め、コルシカ北部の町村は、当時島を支配していたトスカナ系の封建領主に対して、反乱を起した。戦いは長く続き、遂に領主達を追放して一種の共和国を立てた。以来カポラレは町村共同体の司法官で、貧民の権利を守つた。ローマでいえば護民官の役割を果して来たのである。（ただし一三四七年の反乱には、日和見の立場を取り、カポラレ会議はジエノヴァの主権を認めた）

とにかくフランスでは最下級の下士官にすぎない伍長が、コルシカでは古い名譽職であるといふことは、よほどフランス人の好奇心をそそつたらしいのである。「コロンバ」では、ウァテルローで戦つたイギリスの退役軍人が、コルシカの「カポラル」を伍長と思ひこむのが、人物紹介の段階での喜劇的なあやに使われている。

マニフィコとシニョリの区別は、島の支配階級の中の歴史上の区別に基づくものではないだろう。マニフィックは美称で、ただその家が古く、財産が大きく、代々公職に就いたなど、実績の蓄積によつたと思われる。最後の「外国人」の項目に、五百年來支配されているジエノヴァ共和国の市民を入れてゐるのは興味のあるところである。コルシカの先住民族はジエノヴァ人と同じリグリア人なのに。一つの国の血の團結という觀念は、処によつては通用しないのである。フランス人はむろん「外国人」である。「要するにフランス人だけ